

## 小さな世界で

私はよく、「自信がなさすぎる」と言われます。確かに、そうです。私は全くと言っていいほど自分を信じることができないし、杉田純という存在が嫌いでなりません。できることなら俺という存在を無くしてしまいたい。幾度も、今でも、そう思うことがあります。なぜこんな風になってしまったのか？よく、人に聞かれるし、その度に私も自分にそう問いかけます。答えは1つではありません。往々にしてこういったことは様々な経験、要素が複雑に絡み合い、1つの原因に集約できるものではありません。でも、1つのこれは大きいと思える経験があります。…何だと思えますか？それは、小学校6年間続いた、いじめです。そして、それに対する親や先生、「大人」がしたことです。自分を否定され続け、相談しても理解されない、対応してもらっても、それ

は私が本当にしてほしいことではない…。あの時の私は、否定の真っただ中にいました。「お前がここにいる意味なんかないんだよ」同級生の心無い言葉。「たいしたことない」「やられたら、やり返せばいい。やり返さない、お前が悪い」親から言われた言葉。「別の教室に行ってもいいんだよ？」先生から言われた言葉。親や先生は、気遣いで言ってくれていた部分もあるのでしょうか。しかし、私にはそんな言葉でさえも、自分というものが否定されている気しかしませんでした。クラスメイトの言葉は容赦なく、ストレートに否定してくる。親や先生…「大人」の言葉は、一見気遣いであろうことは読み取れる…しかし、その言葉のどこかには、「お前に責任があるんだ」「お前は弱いんだから、他の人とは違う道にしたほうがいいんだ」。そのような、私を信じていない感覚が、どこかに感じられたのです。

あの時、自分がどうしてほしかったのか。…自

分でも完全にはわかりませんでした。いじめからは助けてほしい、でも、特別扱いされるのは、普通の子と違う対応をされるのは嫌だった。自分が悪いような気もする、でも、「お前が悪い」と言われたら、それは絶対に違う気がする。私の心の中は、グチャグチャでした。今、こうして、成長してから改めて過去の感情を言葉にしようとしても…今でも、あの時の私の感情は何だったのか、わかりません。どうしてこんな仕打ちを受けないといけないのか？どうして、誰も私の言葉に耳を傾けてくれないのか？どうして、私のこの痛みが伝わらないのか？ただ、「俺を助けてほしい」。それが私の心の叫びでした。

では、なぜ私はそれを乗り越え、今ここで皆さんに語りかけているのでしょうか？いじめによって、自殺してしまう人、引きこもりのようになって世界が信じられなくなってしまう人もたくさんいる中で、なぜ私は、何とかいじめを乗り越

え、ここまで歩んでこられたのでしょうか？

それは、ひとえにどんなにつらい時でも誰かが私の傍にいたからです。いえ、単に傍にいたからというだけではありません。誰かが、私の喜びも、悲しみも、そして、あの辛かったいじめの痛みをも、共感してくれたからです。自分の感情に共感してもらえれば、1人じゃないと思えます。孤独じゃないと思えます。誰かが自分の痛みを共感してくれる、それだけでどんなに救われたことか。いじめで辛い思いをして、どんなに苦しくても、また頑張ろう、そう思えました。私にとって、彼と、彼らと一緒にいる空間はかけがえのない「居場所」でした。

そう、人は生きるのに「居場所」が必要です。自分の嬉しさも悲しさも共感してくれる人がいる、そんな居場所が。居場所があるからこそ、人は自分に存在価値が見出せます。居場所がある

からこそ、辛いことがあっても、どんな苦難があろうとも、それに耐え、乗り越えるだけの気力を持つことができます。

もう一つ、大切なことは、居場所は与えられるものではありません。自ら構築していくものです。自らが生きていく世界の中で、様々な人間と関わり合いながら作り上げていくものです。

学校でいじめられている子どもたち。彼らは、居場所を根こそぎ奪われています。周りのすべてが自らを否定しているかのようなクラスの空気。学校での事情はわからない親。対応しきれない教師。周りに頼るものが何もない、頼ろうという期待も持てない。誰にも理解されない孤独感と自己否定だけがいたずらに深まっていく。かつて私がそうであったように。彼らには、居場所がありません。作ることも困難です。だからこそ、いじめは子どもの学校における居場所を根こそぎ奪っているのです。

我々は彼らの叫びに耳を傾けなければなりません。彼らがいじめを越えられるように。そして、彼らが、自らの居場所を、自分の力で作れるように。彼らがこの先、どのような困難に向かい合っても生きていけるように。私の弁論の目的は彼らが自らの居場所をつくり、自らの力で困難を乗り越えられるようにすることです。

いじめとは、何でしょう？いじめとは、一定の関係にある人間の間で不当かつ一方的な心理的・肉体的な攻撃がなされることです。しかしながら、いじめは、非常につかみにくいものです。単なる冷やかashiで終わるものから、物理的暴力、時には相手を死に至らしめるものまであります。また、1日で終わるいじめもあれば、何ヶ月も、何年も続くいじめもあります。昨日は加害者だった子どもが、次の日には被害者になることもあります。

では、どういった状況でいじめは起き、さらに我々は通常どのようにしてそれを乗り越えているのでしょうか？多くの場合、学校というものは30人、40人前後の子どもの寄せ集めです。それだけの人間が集められた、不安定な状態でいじめが起きることはある意味で当然といえます。非常に不安定な状態であるからこそ、子どもは自分のポジションを安定させたいと思います。だからこそ、誰かをいじめることで自分のポジションを安定させようと思ってしまうのです。つまり、「居場所」という観点から言うと、いじめをしてしまう側の子どももある意味「居場所」に困っていると言えます。

そして、そんないじめを我々はどう乗り越えているのでしょうか？いじめというものは、非常に辛いものです。精神的なダメージが非常に大きいです。精神的なダメージを負った時、人間は

どうするか。多くは、他者に自らの痛みを共感してもらおうことで心の傷を癒し、立ち直っていくものです。大切なのは、どんな他者に共感してもらうかです。日常的に関わりがない他者に自らの感情を共感してもらおうというのは非常に困難です。そう、親しい他者でなければ感情の共感ということはできません。そして、親密な関係の構築のためには、継続的な関わりが重要になります。

以上の点を踏まえ、私が提案する政策は 2 点です。1 点目がパートナーシップ制度の導入、2 点目がゼミ学習の導入です。

まず、1 点目のパートナーシップ制度について。入学時に学校側が無作為に 2 人の子どもをそれぞれパートナーに認定し、学校活動の一部もそういった 2 人 1 組向けのものにします。パートナーは 2 年ごとに更新していきます。この



政策によって継続的で親密な人間関係、すなわち居場所を構築する足掛かりを子どもに提供します。特定の子と継続的に学校活動に取り組むことで、パートナーとなった相手が自分にとって感情を共感しあえる親密な他者となることができ、子どもにとって大切な居場所が学校の中に担保されることになります。

次に、2点目のゼミ学習の導入についてです。クラス内で小規模のグループを複数つくり、それぞれのグループに課題を与え、共同でその課題に取り組んでももらいます。小規模なグループにすることで個々の関係を濃密にし、共通の課題・目標に向かって取り組みを行うことで連帯感や人と協力する力を養うことができます。この弁論では居場所が大事であることを繰り返し述べましたが、居場所は与えられるものではないけません。自らの力で構築していくことに意味があります。そこでこのゼミ学習の導入によっ

て子どもたちが自力で居場所をつくる力を伸ばすことができるようにするのです。子どもが自力で作れるようにする目的に鑑みて、教師は極力活動自体には介入しないようにして、子どもの自主性を重視することとします。

いじめをなくすのは、難しいでしょう。人と人の関係がこじれる可能性がある以上は、いじめが生じる可能性も消えません。今日、ここにいる人の中にも大勢、いじめられた経験のある方はいるでしょう。では、そんな皆さんはなぜいじめを乗り越えられたのですか？多かれ少なかれ、誰かに支えてもらったからでしょう。誰かが支えてくれたからこそ、立ち直れたのでしょう。共感してくれる誰かがいること、居場所があることが、誰にとっても必要なことです。居場所がある。誰かが共感してくれる。それだけで、ろくでもないと思っていた世界は変わります。全ての

子どもが居場所を持てるように。

ご清聴ありがとうございました。